巻頭言

雑感_ 2019年度を顧みて_

保健科学部リハビリテーション学科作業療法学専攻
松房利憲

3月初旬の午前中、自宅近くのコンビニとドラッグストアを数件巡ってみた。マスクとエタノールが消えているとの噂が本当なのか確認するためである。どこの店でも棚の場所は一目で分かった、何も無いから。代わりに「本日入荷の予定はありません」の張り紙。政府は量産体制に入ったと言うが、誰の手に渡っているのか。

4月に看護学部が開設され、保健科学部の入学生は新カリキュラムに移行。5月には年号が平成から令和に改まった。本学にとってそこそこ良い年度になるかと期待していたが、秋風が吹く頃から様子が変わった。10月の雨台風で千曲川が氾濫したことによる家屋や鉄道、道路などの甚大な被害。冬は幾つものスキー場が営業できないほど雪のない暖冬。追い打ちをかけるように新型コロナ肺炎の発生である。本学でも卒業式の縮小、卒業祝賀会の中止、保健科学部2年実習反省会の延期など大学の行事・授業に大きな影響があった。

一時「想定外」という言葉が流行した。「想定外」とは思ってもいなかった事態の発生という事だろう。個人的には「想定外」という言葉は個人にとって都合の悪いことを呼ぶ場合が多い気がする。想定外とは言わないものの、周りから相手にされなかった研究がノーベル賞につながった例もある。とんでもないアイデアが後に当たり前になるかも知れない。未完成の段階であっても様々なアイデアを言語化することも大事であろう。

看護学部は現在傾斜開設中であり、毎年新任教員が増えることになる。また保健科学部も徐々に教員の新陳代謝が進むであろう。言い換えればそれだけ新しいアイデアが増加すると考えてもよい。他人のアイデアを知るのは楽しいことである。各教員の研究成果や仮説を自由に発表できる場として、本紀要が育っていくことを望む。また、早く新型コロナ騒動が収束し、平穏な日々に戻ることを願うものである。

令和2年3月記